

分断された家庭のなかの「良妻」

セアラ・ヘイルのハウスキーピング小説に領域論的矛盾を読む試み

増田久美子

はじめに

料理下手なアイルランド出身の料理婦、ベッドメイキングが
できない小間使いのオランダ人少女。ハリエツト・ピーチャ
ー・ストウは、一九世紀アメリカの女性雑誌『ゴードීーズ・
レディーズ・ブック』に寄稿した「ある主婦の試練」(一八三
九)という物語において、彼女たちが引き起こす幾多の「小事
件」に喚くアメリカ人主婦の姿を描いている。彼女たちは中流
階級家庭に雇われた家事使用人であるが、ブリキのロースター
や戸口の呼び鈴を知らず、アイロンがけも食器洗いもろくにで

きず、客人をまともに客間に通すことさえできない移民女性で
ある。ついに主人公である「わたし」は、同様の境遇にいるは
ずの女性読者たちを巻き込んで「わたしたち主婦」という立場
に立ち、次のような疑問を呈するにいたる。「わたしたち主婦
はどうすればよいのかしら。奴隷の召使いでも呼べばよいとい
うの、それとも、家庭を諦めるといふの(「……」、夫のもとか
ら自立して、テント住まいでも始めたほうがよいのかしら)」。じ
じつ、アンテベラム期の女性雑誌や家庭小説には、ストウ
の描くような家事使用人と悩める「女主人」の物語が散見され
る。使用人たちは知性や作法や常識に欠け、大抵の場合、「ブ

リジット」や「ノラ」という名のアイルランド人移民としてステレオタイプ化された²²。また、これらの物語は、中流階級家庭の若い主婦たちを讀者として想定した家庭管理読本でもあった。ブレイン・マッキンリーはとくに「有能で忠誠心に富む使用人を確保し、訓練し、管理する」ことの重要性が教示されている作品群に着目し、それらを「ハウスキーピング物語」と称してその社会的役割を分析している。これらの物語はどんなに家庭管理が不得手な新米主婦であろうと、正しく使用人を管理すれば「慈悲深く、家族愛のあふれる」家庭を築くことができる」と讀者に論し、そしてその教えには、「男性的価値観の支配する冷酷な市場」と対置される女性たちの「キリスト教的家庭」こそ、激変する外部社会に対する緩和剤として機能しうる²³ことが含意されていた²⁴。

マッキンリーの研究は、これまで看過されてきた物語群のなかに、家庭性ドメスティシテと社会をつなぐ積極的な意義を見いだすものとして注視に値する。しかし、家庭管理という概念およびその実践に内包されるイデオロギー上の根本的問題点が追究されておらず、さらには物語の「教訓」とテクスト上の「女性の領域」の関係性が単純化されてしまっているために、以下のふたつの論点を付加する必要があるだろう。第一に、アンテベラム期北部の白人中流階級女性が、家事使用人の「女主人」となるさい

に付随する問題である。メアリ・ケインが議論するように、彼女は「女主人」になることによって、伝統的な共和制理念に抵触し、同時にヴィクトリア時代の「真の女性性」トクヘンリーウィマンシップから逸脱する不安をも抱え込んだとするならば²⁵、これらの物語や小説はどのようにしてその不安を解消し、自己形成の可能性を提示したのだろうか。第二に、まさにハウスキーピング物語が「男女の領域分離主義」を教化しようと、女性こそが家庭の守り手であり主権者であるという「教訓」について語れば語るほど、テクストはその意図に反して、男性と家庭の強固な癒着を開示してしまふ問題である。本稿はこのように「女性の領域」をめぐって矛盾しあう二点が結節するテクストとして、ストウと同時代作家であったセアラ・ヘイルのハウスキーピング小説『家庭管理の物語』(一八四五)を取り上げる²⁶。彼女は『ゴードイーズ・レディーズ・ブック』誌の編集者であり、初期共和制の啓蒙的理念とヴィクトリアニズム的な道德観に立脚した家庭理論家であった。そして、その著作において「男女の領域分離主義」を唱導し、白人中流階級の「感傷的な」女性文化の形成を促進させた保守派として、また、「女性が政治領域から撤退すること」を企てた反フェミニストとして、長らく認識されてきた²⁷。ここでは典型的なハウスキーピング物語として読まれてきたヘイルのテクストを通じて、領域論の矛盾に焦点を合

せてみたい。ヘイルは読者に「女主人」としての模範的自己像を提示し、女性に自身の領域である家庭を守護せよと説く一方、彼女のテキストは「男女の領域分離主義」が隠匿しようとしていたことを露呈させてしまうのだ——つまり、家庭は主婦たちの領分であると規定しながら、その領域に執着していたのは妻ではなく夫であったという事実を。はたして、これが意味するところは何か。

ドメスティシティ研究における「真の女性性」や「男女の領域分離主義」等の強力なイデオロギーは、ことに一九九〇年代以降、その多様な文化的・政治的意義やコンテキストの綿密な検証を通して、多くの研究者によって再解釈および修正が試みられてきた²⁷。そのような研究潮流において、本稿は上述の問題点を検証するにあたり、「男女の領域分離主義」への信奉が培り出してしまう性差と公私空間の関係性を、ハウスキーピング物語に埋め込まれたテキスト上の争点として読み解くものとする。

1 危機に立つ「女主人」

——アンテペラム期の家事奉公事情

アンテペラム期のハウスキーピング物語には一定のプロット

があり、そこに登場する人物たちはそれぞれに明白な役割を持つ。家事の苦手な若妻と彼女を悩ます家事用人たち、「賢明なる助言者」であり「作者の代弁者」でもある夫、そして、若妻に家事を指南する年配の女性である²⁸。まずはヘイルの小説プロットを追い、次に当時の家事奉公にかんする社会背景を概観したい。

『家庭管理の物語』の主人公メアリ・ハリーは、北部の都市部に暮らす白人中流家庭の主婦である。彼女には家庭管理の能力がなく、結婚後の「家事の義務」をすっかり用人たちに丸投げし、しかも用人たちの雇用と解雇を平然と繰り返していた。家事用人たちの不誠実や無能さもさることながら、メアリは家事という「骨折り仕事」(96-110)を避け続け、「流行」と社交に明け暮れてしまったため、しだいに一家の秩序や平穩が掻き乱されていく。このような状態を憂慮した夫のウィリアムは妻に説教をする。「健康な既婚女性であれば皆、自身の家庭を守るべきだ。家庭とは神聖な仕事場であって、女性にはその場から退く権利などないのだから。それはいわば結婚の誓約なのだ——それは女性という人格に尊厳を賦与するものなのだ」(39)。このような夫の「教訓」にもかかわらず、妻の家事嫌悪や流行熱、そして用人たちの放埒ぶりは悪化し、一家は破産の危機に見舞われてしまう。低落した家庭生活を「改革

する」ため、ウィリアムは叔母のルースをニューイングランドの田舎から呼び寄せ、妻に家事教育を施すよう頼み込む。ルース叔母の寛大な指導のもと、徐々にメアリは家庭を管理する主婦としての役目に覚醒し、いかに自分が流行に囚われた「奴隷」であったかを反省する(12)。もはや彼女はかつての軽薄な若妻ではなく、「精神的かつ道徳的な優雅さ」(13)を湛えた「よき家庭の主婦」へと変貌する。そして、ハリー家の家庭の幸福が予見されて、物語は終幕する。

このような展開において読者が目にするのは、妻の家事への無関心につけ込む「無教養で粗野で凶々しく、ときに詐欺的な使用人たちの態度である。しかし、妻が雇用者としての責務を放棄していること、また「女主人」として文化的・社会的に優越した地位にあることから、ハウスキーピング物語で非難的となるのは、むしろ女性主人公の愚行である¹⁰⁾。家庭管理ができずに諸々の「流行」に執心する妻の愚かさは、もちろん、当時の「真の女性性」を礼讃する中流階級的な価値観とは相容れないものであった。

アンテペラム期において白人主婦が家事使用人を雇用しようとするとき、彼女たちが恐れたのは「愚かな妻」という不面目に陥ることばかりではなかった。彼女らにとって、「女主人と使用人」という雇用関係じたいが、まさに「真の女性性」から

の逸脱を示すものだったのである。というのは、他者を自邸に雇い入れることは、家庭空間を市場空間から経済的に分離させようとする「男女の領域分離主義」の見地からすれば、神聖な家庭の内部に市場性を侵入させるイデオロギー上の禁忌を意味していた。さらに、女性が雇用者となって被雇用者の「上役」¹¹⁾として振る舞うことは、「女性らしからぬ」行為だとされた¹²⁾。

また、このようなヴィクトリアニズム的なジェンダー観や領域論に通底する共和制イデオロギーという側面からみても、共和国アメリカの女性たちが自ら「女主人」となって使用人階級の「形成に加担することは、理念上、容認されることではなかった。つまり、家事労働に対する金銭的報酬を期待されない主婦にとって、家事を請け負う他者に賃金を支払うことは、「不名誉」¹³⁾を受けることに等しかったのである¹⁴⁾。それでもやはり、都市部の白人家庭が中流階級の家庭生活を維持するには、家事使用人の存在が不可欠であったことは事実である。彼女たちは北部中流階級の白人女性としての自己像を規定しようとするうえで、ジェンダー的規範から逸脱する不安と共和制理念への背徳感を抱えるという二重の危機に直面したのである。

「市場革命」以前、とくに一八世紀後期から一九世紀初期における家事奉公の現場では、「家事手伝い」(helps)という奉公の慣習があった。若い白人女性が自分以外の家庭の主婦のもと

家事労働の補助的役割をつとめ、その対価として家事全般にかかわる知識を教授されていたのだが、この慣習は労働市場の出現とともに衰退し、代わりに女性労働者が賃金で雇用されるあり方が主流となって、「家事使用人」(Domestics)が登場するようになる。だが、白人男性が「雇われ者」であることの依存的・隷属的性格を「自由労働」という言説によって否定できたのに対し¹⁵⁾、家事使用人については、まさに賃金に依存し雇用者に隷属するがゆえに、アメリカ生まれの白人女性にとって——ケインの言葉を借りれば——「下品で卑俗で、不適切」な職業とみなされるようになる¹⁶⁾。そこで、その労働市場の穴を埋めたのが移民女性たちであった。とりわけ単身渡米したアイランド人女性は、雇用先ばかりか当座の住居も必要であったため、彼女たちにとってアメリカ女性が嫌忌した「家事使用人」は好適の職業といえた。一九世紀中葉までには、北部の都市部における家事奉公は多くの若いアイランド人女性が担うことになった¹⁵⁾。

こうして家事奉公は女性が従事する労働においてもっともありふれた職業形態となり、白人中流階級家庭の主婦と労働者階級の移民女性は、「女主人」と「家事使用人」という雇用関係を通じ、家庭という場において階級的にも民族的にも異質な女性どうしの体験をぶつけ合ったのである。「家庭礼讃」の時代

に生きる白人女性たちは、家庭空間に侵入する「異質なもの」を排除しながら、自身の領域を保護・管理することが期待される一方、その領域内に家事使用人という他者を雇い入れて監督した。やがて、そのような雇用の実践は彼女らの「女性の務め」^{ワーマンズ・ジョブ}となったのである¹⁶⁾。

2 白人中流階級家庭の「良妻」をつくる

このような家事奉公事情を背景とし、北部の白人女性たちは「女性らしさ」や共和制イデオロギーに背くことなく、いかにして家事使用人の上に立つ「女主人」としての立場を正当化しえたのだろうか。もとより民主主義を標榜する共和国アメリカにおいては、奉公という概念とそれにもなう階級差の問題や、賃金労働とそれが示唆してしまう依存性や隷属性は、当然のことながら、社会が抱える矛盾であった。しかし、それを超克する論拠となったのも、同じくアメリカ社会が掲げる平等と階級の流動性という力点だった。

アンテベラム期の家庭理論について著述する論者や作家たちのなかで、たとえば、キャサリン・ビーチャーは『家政論』(一八四一)において、「この国では、子どもたちが幼い頃より隷属を(……)不名誉や墮落の最たるものとして嫌悪するよう

に教育されて」いるため、「使用人という用語とその職分が、多くの人の考えでは、ほぼ奴隷と同じことになっていきます」と指摘したうえで、そのような見解を改めようと「あらゆる階級において労働に貴賤はありません」と説いている¹⁷⁾。これは、「君主制国家や貴族的社会」では「すべての地位や階級が所与のものとして固定されている」(16)のに対して、階級差別を否定するアメリカ社会の民主性を謳ったものといえよう。ピーチャーは「すべての物事が動き回って変化しています。貧しき者が裕福になり、富める者が貧困に沈むことがあります。労働者の子どもたちがその才と進取の気性によって、知性や富や身分において高潔な人となることもあります」(191)と述べ、労働者階級から中流階級への上昇の可能性を是認する。このような階級間移動について、より具体的に議論したのは、セララ・ヘイルであろう。彼女は家事使用人の階級的向上を積極的に呼びかけている¹⁸⁾。

また、「平等」という観点から、家庭内労使関係の不平等や階級差別を法的「契約」によって解消できると捉えたのは、キヤサリン・マリア・セジウィックやハリエット・ピーチャー・ストウのような女性作家たちであった¹⁹⁾。たしかに、労働契約は雇用者と被雇用者の双方にとって法的な主体性を保証するが、それは「感情も人間味もない」ものであったため、彼女たちの

テクストにおける「冷ややかな」契約上の関係は、感傷的・母親的愛情による「家族のような温もりのある」母子的關係によって上書きされる必要があった²⁰⁾。バーバラ・ライアンが「隷属の感傷的ヴィジョン」と呼ぶように、使用人がそのような女主人の庇護にある場合、その隷属性は不可視化され²¹⁾、小説の女主人は使用人に対して慈悲深く寛容に接することで、「共和主義らしからぬ」かつ「女性らしからぬ」雇用者となることを回避し、むしろヴィクトリア時代の感傷的・博愛的な母親として存在しえたのである²²⁾。

はたして、セララ・ヘイルのハウスキーピング小説にも、このような白人中流階級の女性たちの正当化が描き込まれているのであろうか。『家庭管理の物語』は読者である白人女性たちに対し、ニューイングランド地方の伝統的な家庭性とヴィクトリア時代のブルジョア的価値観が折衷した、いわば近代的な良妻になりうることを教え諭す物語である²³⁾。

ヘイルの小説が意図する目的は明快である。夫による教訓が示しているように、中流階級家庭の主婦は家事や使用人管理といった家庭の義務を果たさなければならず、さもなければ、「よき家庭の主婦」という名誉ある称号が剥奪される恐怖が語られている。メアリ・ハーリーの主婦の座を脅かしたのは、ホプキンス夫人である。ハーリー家に入入りする数多くの使用人のう

ちもつとも特異な人物で、メアリは彼女について「容貌はきわめて男のようだった。家庭の管理はさておき、船の操縦が適任かとみえた」(46)との印象を受ける。「ぎらぎら輝く指輪」(46)をちらつかせ、贅沢な所持品からして使用人の風貌を呈さないこの人物は、じつは高給取りの家政婦であり、ハリー家に経済的破滅をもたらす悪徳の者であった。彼女の家政婦としての仕事は「食卓の段取りをみて、食材の質と量について指示する」(47)のみであるが、社交に気を取られて使用人たちの状況を把握できないメアリは、すっかりホプキンスに家庭の支配権をゆだねてしまうのだ。

女主人、ホプキンスの居場所は客間であり、ドーカス〔使用人の少女〕は彼女の指図された通りに動いた。じじつ、ハリー夫人は家庭管理を放棄してしまったのだ(48)〔傍点引用者〕。

客間は一家の主婦が自身の家庭的権利を行使する場として、女性にとって重要な領域であるが、ホプキンスにその場を奪われてしまう。彼女の女性らしからぬ容姿と使用人らしからぬ奢侈な装いは、「真の女性性」というヴィクトリアニズム的ジェンダー観と「簡素さ」を美德のひとつとして奉ずる共和制思想

への侵害をほのめかすもする。ホプキンスという人物は、一家の主婦が自らの義務を怠った場合、自身が治定すべき「家庭の帝国」から追放されることの恐怖を表象しているのである。

では、家事の技術や使用人の監督術を心得ない主婦は、どうすればよいのか。ヘイルは、メアリのようなまったく思慮に欠ける愚かな妻でさえも理想的な良妻になりうるような、ひとつの自己形成モデルを提示する。伝統的なニューイングランド的思想、すなわち、初期共和制の田園的・道德的価値観をそなえた年配の女性が、型通りのプロットに沿って新米主婦を導くために登場するのである。ルース叔母はハリー家を刷新するにあたって、家庭の無秩序の原因がメアリの家庭管理への基本的な誤解にあることを即座に見抜く。メアリは「レディともなれば、頻繁に外出しなくてはなりませんし、友人を迎え入れるのに着飾ることも必要です」と主張し、家事労働を請け負う使用人の必要性を訴え、「あくせくした骨折り仕事をさせないでください」と叔母に嘆願する(110-112)。すると、慧眼の叔母は「あなたは家庭管理と労働を混同していますね。それは違います」(112)と指摘する。叔母の言葉通り、アンテベラム期の中流階級社会において「レディ」になることは、実際に種々の家事をこなすことではなかった²⁴。ルース叔母の家庭管理とは、まさしく使用人の管理と育成を指す。彼女は何名もいた無用な

家事用人たちを一掃して最小限にとどめ、「屋根裏から地下室まで徹底的に清潔に」し、また、質素だが「風味のよい」食事を夫妻に給仕する(115-117)。あくまでも穏やかに進められたこの家庭改革は、少数の「優秀な使用人」なしには果たされない。叔母はメアリに「まずあの娘(ドーカス)に指示を与えることを学べば、彼女はあなたにとって優秀な使用人になりますよ」と教示する(118)〔傍点引用者〕。やがてメアリは社交界とのつながりを断って熱心に聖書を読むようになり、息子を乳母に任せずに自分で世話をし始める。ふたりの忠実な使用人のみがメアリの家事を手伝うことになり、メアリはいまや「よき家庭の主婦」として自己改革を遂げるのである。

ハリー夫人は優雅にして簡素(elegant simplicity)な衣装を身につけており、それは、流行好きな彼女の友人たちでさえ認めるところであった。夫妻は雰囲気のない小さなパーティーを開くことで評判になり、そこには無駄な浪費のない気前のよき(liberality without useless profusion)が漂っていた(139)。

ダッデンは「優雅にして簡素」と「無駄な浪費のない気前のよさ」という言葉の組み合わせに注目し、ここにヘイルの理想的

主婦像があるとする。それは、道徳的優越感(「簡素」であり「濫費」がないこと)とブルジョアの顕示欲(「優雅」でしかも「気前がよい」こと)の両方を享受できることが、家庭管理における最大のアピールだという²⁵⁾。ではさらに、その「簡素さ」がとりわけ共和制イデオロギーの意味で語られていること、そして、そこへヴィクトリア時代のブルジョアの価値観が混入されていることに着眼してみたい。共和主義的簡素さは、いわば「ニューイングランド人の遺産」としてブルジョア的な流行と消費に抗して並記されるとき、郷愁的にことほがれる価値観である²⁶⁾。ヘイル自身、ニューハンプシャー生まれのカルヴァン主義者であり、その宗教的理念は平等な道徳律を旨とする共和制イデオロギーと密接に結びついていた²⁷⁾。たとえば、自己顕示的な浪費にはしる「流行狂信者」(112)のメアリが批判されるさい、ヘイルが称揚する「簡素さ」は、ルース叔母の「質素で飾らない」家庭性(122)に見いだされ、さらに、それが田園的過去と初期共和制の伝統に根ざしている点に読者は気づかされる。メアリの浪費癖を諫めるため、ルース叔母は共和国市民としての立場から蓄財の責務について説く。「わたしたちには富を築くことについても責任があります。誰もが他者への善行のために備えておくべきですし、将来のためにも確保しておく必要があるのです」(107)。そして叔母は、メアリと同

様に浪費癖のあった隣人女性が「卑賤に陥った」という悲劇的結末を事例として、「簡素」と「浪費」を対比させる(107-108)。

しかしながら、ヘイルは初期共和制の啓蒙的なイデオロギーを自身の中核的思想としながらも、柔軟に時代思潮を汲み取ることのできる女性であった。パトリシア・オッカーが分析しているように、『レディーズ・マガジン』誌の編集者時代には、彼女の思想的変遷としてヴィクトリアニズムの価値観への移行が検証されている²⁸⁾。初期共和制の伝統的価値観にヴィクトリアニズムを接ぎ木して、融和的なイデオロギーを巧みに作り出すことがヘイルの特徴だとすれば、最終的に小説が提示した「女主人」像とは、「共和国の母」と「ヴィクトリア時代のレディ」が融合した白人中流階級の理想的アメリカ人女性像ということになる。 「伝統」と「当世」のふたつの時代的・思想的交差を「近代的」であると特徴づけるのであれば、ヘイルの眺望する家庭性においては、その「女性の領域」の中心に近代的な「よき家庭の主婦」の姿が出現するのである。

3 家庭空間を分析する

このように、セアラ・ヘイルのハウスキーピング小説は、ア

ンテベラム期北部における白人中流階級の女性に模範的な自己形成モデルを提供することによって、「男女の領域分離主義」を称揚する典型例となっている。だが、テクストはそのような明快な領域論を展開しつつも、ハーリー夫妻の「使用人問題」をめぐる家庭内不和に視点をずらしてみると、19世紀のジェンダー的行動規範の矛盾を新たな問題点として浮上させてしまう。ハーリー家の私的空間、すなわち、家庭という「女性の領域」に執着する夫ウィリアムの姿が示唆されているのだ。白人男性のこのような身振りは、いったい何を意味するのか。通常、ハウスキーピング物語では夫が「領域」を正当化する役割を演じ、妻がその教訓的主張に従うという構図が配置されるが、گرانヴィル・ガンターがヘイルの作品分析で明らかにしたように、領域論にかかわるレトリック上の戦略的読みによって彼女のテクストを検証してみると、その基底には「女性の領域」のパラドクスというべき提示があるのかもしれない²⁹⁾。

「男女の領域分離主義」は、女性ないし妻の本来の場が家庭という私的空間にあると規定する。家庭とは、女性特有の道徳的優越性が、夫に法的に従属するという現実とうまく調和している場であるため、家事に意味なメアリが示した夫の説教への不服従は、当然のことながら、家庭的無秩序を引き起こす。だが同時に、ヘイルのハウスキーピング小説は夫の家庭の領域への

深いコミットメントをも表出させてしまう。もちろん、ウィリアムは自分の領分が公的・経済領域にあることを自覚している。たとえば、メアリがナンシーという優秀で誠実な家事用人への不満を不当にもまくしたて始めると、その場から逃げ出したくなった夫は「君のやりたいようにやりたまえ。僕の居場所はない。家庭は君の領分なのだから」と言い残して、家庭の外部にある自分の店へと向かう(10)。ところが、この場面に先立って、メアリがナンシーを解雇したいと夫に迫ったとき、ウィリアムは熱心に諫止する。

正直で忠実な事務員を雇ったとき、僕だったらどんなに気に喰わないことがあっても、目をつむっておくだろう。その人物のすぐれた点のほうが勝ると、しっかり判断できれば。〔……〕ナンシーの件についても、同じ基準を適用したほうがいい。もし本当に手に負えないほど厚かましいのであれば、彼女を解雇しよう。でも、そうでなければ、ぜひとも彼女には留まってもらいたい(10)。

ウィリアムは「市場的効率性」の論理を家庭管理の判断基準にすることによって、妻の領分である家事用人の解雇問題に関与する。夫の家庭への介入は、おそらく、妻の効率的管理能力が

家庭の経済的・道徳的危難を救うという彼の信念を示しているのだろう(30)。だが、妻の激しい反論により、優秀な使用人は解雇されてしまう。メアリの見解によれば、ナンシーが解雇に値するのは、彼女には「金曜の夕べ」に行われる講演会に通い、ときおり母親を見舞うといった「ありあまる特権」(30)が与えられ、また、「高い賃金」(10)が支払われているからだ(傍点原文)。しかし実際にはナンシーの賃金は高いわけではなく、母親の訪問も年に二週間のみであり、テキストにおけるメアリの利己性は多分に強調されている。

ハーリー家の使用人問題はさらに続く。悪徳家政婦のホプキンス夫人がやってくる以前に、ブリジットというアイルランド人料理婦を雇う体験が語られる。ブリジットは「数珠玉を数えながら自分の罪業を告白し、〔……〕ミサにはいつも出席して、徹夜の集会に招待されたときにはかならず顔を出した」(30)と描写されるように、典型的なアイルランド生まれの使用人として登場する。多くのハウスキーピング物語と同様、彼女の粗雑な作法と調理下手、飲酒癖、ハーリー家で催される同郷人との「ちょっとした飲み騒ぎ」(30)といった失態の数々がコミカルに描き出され、アイルランドの文化的背景を「野蠻」とみなす具体例となっているのだが、ブリジットが台所で「恐ろしい破壊行為」におよぶほどの泥酔状態で発見されたときには、

ウィリアムは彼女を警察へ突き出し、さらには「六か月間の矯正院」送りに処すのであった(80)。主人の仮借のない態度は、ホプキンス夫人にも向けられる。彼女の異常な家計濫費や、書斎の机から金銭をくすねるといった盗癖が露呈すると、ウィリアムは「なんの前置きも弁明の余地もなく、まったく実務的に(in true business style)」その家政婦を解雇する(82)〔傍点引用者〕。

夫によって家庭空間に持ち込まれる実務的態度は、すぐれて市場的な価値をとまなう。使用人を雇用する、指導する、解雇する等の家庭内管理活動は、家庭とは対立的に置かれた領域、すなわち、市場経済という男性的領域における活動を模倣するものとして通常とらえられているが^⑧、ではヘイルのテクストにおいては、夫の家庭内における市場的価値は何を意味するのか。あきらかにハリー家では、妻ではなく夫が——ウィリアム自身の言葉によれば——「家政婦の詐欺行為、料理婦の二枚舌」(83)から家庭という聖域を救済するのだが、そのさいに行使されているのが夫の実務家的手段である。これはつねに夫に不服従であり、ホプキンスの解雇についてでさえ不同意であった妻をも圧倒する力をもち、いうなれば、家庭内係争に判決をくだす父権的権威として機能する。女性の感化力ないし妻の家庭的権能が卓越するとされる家庭空間において、ハリー家

ではなぜ男性的価値観が優勢なのか。それを確認するにはミレット・シャミアの「ジェンダー化された家庭内分離」^⑨という視座を導入してみたい。

「男女の領域分離主義」は「家庭的、私的、女性的なもの」と「市場経済的、公的、男性的なもの」がそれぞれ対立しあう領域として社会をジェンダー的に分断するが、これに加えシャミアが根拠とするのは、家庭空間内を妻の領域である「客間」(「親密性、社交性、顕示」を表す女性的空間)と夫の領域である「書斎」(「隠遁、孤立、知的な嗜好」を表す男性的空間)に重層的に区分する思考法である。シャミアは近代の「私秘性礼讃」を基軸に、私的領域という概念がどのように「ブルジョア階級化」されたのかを精査する。それは、「男女の領域分離主義」ないし「家庭性」とは別なる「リベラルな個人主義」という準拠枠から把握しようとする議論であり、「個人」はその自己のあり方を家庭という場によって画定されたと解説するものである。すると、「家庭性」が近代的主体を形成するという見解と同様のようだが、この点で注意すべきは、「家庭性」が「親密性」に基礎を置くのに対し、「リベラルな個人主義」においては、「所有」という概念にもとづいて、男性的主体が形成され^⑩、しかも、その「彼」は(自己)所有を脅かすいかなるものに対しても、確固たる自由(ないし放任)を求めたというこ

とである。こうして、資産家として（外部社会の）市場における「経済的自由」を享受しているブルジョア階級は、自身の内の領域としての家庭のなかにも個人的な自由志向を生じさせた。つまり、個人主義を確立させる家庭内の「個人的自由」とは、一家の法的所有者かつ主人である中流階級の白人男性のみが専有できたのである³⁴⁾。では、男性ないし夫は、いかにして家庭内に私秘性を獲得しえたのだろうか。

シャミアは、アンテペラム期北部における中流階級家庭の一般的な個人住宅にも注目する。そのヴィクトリアニズムの建築の平面図を眺めてみると、家庭空間内に「統一と調和」をもたらそうと、「客間」と「書齋」がシンメトリーに配置されているのだが、その外見上の男女両領域の平等性は、じつは家父長的支配力が優勢であることを物語っているという。なぜなら、女性の領域である「客間」の機能が充実すること、つまり、「客間」が他者との親密性を高め、ブルジョアの顕示欲を示しうる社交の場であることは、妻がつねに誰からも「可視」の状態にあるために、女性の私的空間の消失を意味し、同時に夫の私秘性が確保されるからである。したがって、「客間」と「書齋」のシンメトリーの統一と調和とは、妻の領域である「客間」の充実によって中流階級家庭としての役割（「世間体」「上品さ」「快適さ」等々）が果たされていると見せかけながら、

裏面では、夫の「隠遁や孤立」を可能にし、（リベラルな個人主義としての）男性的私秘性が妻の家庭内権威を凌駕すること
を隠蔽していたといえる³⁵⁾。

ハリー家について、ここからふたつの事実が推察されよう。ひとつは、夫ウィリアムには家庭における自分の私秘性を確保したいという欲望があること、もうひとつは、それを達成するために、家庭内不和を調停して「統一と調和」をはかる必要性があるということである。「親密性、社交性、誇示」を表現すべきハリー家の客間は、「冷たく陰気な」(114)空間となっており、妻の「客間」と夫の「書齋」の平等な対称性による家庭内の統一と調和は成立されておらず、客間の機能が果たされていない。だからこそ、家庭管理の無能な妻に効率的管理能力を伝授するため、男性的な市場的価値が夫によって家庭内に持ち込まれざるをえないのである。また、家事用人たちの雇用と解雇が繰り返されるごとに、夫が「使用人を頻繁に変えると、僕たちは気むずかしい人間だと思われてしまう」⁽¹⁰⁾と懸念するのは、「評判の失墜(……)そして、快適な暮らしの喪失」⁽³⁸⁾という不安に由来するものとわかる。もし「評判」と家庭の「快適さ」が夫にとって決定的に重要な二要素だとすれば、彼はやはり世間体を維持しながら中流階級文化に生きる白人男性であり、また、ブルジョア階級として家庭内の「快適さ」、

すなわち、個人的自由を享受する人物だといつてよい。ウィリアムは「自分の家庭を快適かつ裕福にするために、家政婦はホプキンス夫人とは異なる資質をあわせ持つべき」という結論に達し⁽⁸²⁾、妻の反対を押し切つて彼女を解雇する。アンテペラム期の快適な中流階級家庭とは主婦と使用人たちの労力により創り出されたものであるが⁽⁸³⁾、まさにその快適さを要求したのは、自身の私的領域を保証しようとした夫たちであった。とすれば、家庭管理ができない妻は、夫にとって自己の私秘性を脅かす存在にほかならず、ウィリアムにとって、メアリこそが(悪質な使用人たちよりも)自分の個人的自由を奪うる本当の脅威であるといえまいか。

メアリが夫の私的な「読書室」(ウィリアムが書齋として過ごす場)に侵入している事実を暗示させる記述があるが、それは夫が妻を脅威としてみなす証左になっている。ウィリアムがルース叔母に聖書を読む習慣がないことを打ち明けたさい、彼は「妻に意味ありげな視線」をやつて、「メアリは日曜日になると新聞を読むんですよ」(26-127)と発言する場面がある。彼の「意味ありげな視線」とは、妻は敬虔なキリスト教徒ではないとの非難というよりも、妻は、夫の私的な書齋で新聞を読む習慣があることについての告訴として読みえよう。夫の書齋に侵犯しその私秘性を蚕食するような妻は、「客間」が正しく機

能するように、的確に家庭を管理できる良妻として躰けられる必要がある——けつして夫の領域で読書行為をするような女性であつてはならないために。メアリがルース叔母のもとで着実に「良妻」への道を歩んでいることを知ると、ウィリアムはこれから到来するであろう「家庭の幸福な日々」(88)を予見することによつて、もはや家庭における自己の私秘性を脅かす妻に慄くことはないという安堵感を露わにする。そこで、ハウスキーピング物語における夫の教訓的主張とは何かを再考してみると、「ジェンダー化された家庭内分離」が解き明かすのは、それがけつして妻の家庭内主権の掌握と道徳的優越性を謳った単純な原理などではなく、男性による家庭支配を正当化するための道徳的な矯飾ということになる。う。「よき家庭の主婦」になることは、女性が外部社会での政治的な「権利」や法的な「自由」をもたないのと同様に、「家庭の帝国」においても結局はその主権を夫に譲渡せざるをえないことを意味する。こうしてメアリは、ハウスキーピング物語の教訓ないし夫が企図した理想の「よき家庭の主婦」へと回収されてしまうのである。

ヘイルは性差を強調する「男女の領域分離主義」を声高に掲げ、そして小説においては「よき家庭の主婦」の模範例を提示しながらも、彼女のテキストはそのイデオロギーが規定する内実を暴いてしまう。ハウスキーピング物語の領域論的教訓だと

みななされてきた「夫の説教」とは、家庭空間における夫の私的領域を確保し、それを正当化するための修辭的な便宜として、結局のところ、家父長としての權威を再主張するものだったのである。

おわりに——領域論のさらなる可能性へ

ヘイルのテクストは夫の「女性の領域」への執着を露呈させるが、それはメアリにとっては「よき家庭の主婦」の名のもとに、家庭内主権を断念するという代償がともなわれることでもある。しかし、だからこそいま一度確認すべきは、夫への不服従がじつは「自由」をめぐる議論へと切り開かれていく可能性についてである。改心したメアリが書簡を通じて、以前の流行熱からの解放感について「わたしは流行の最悪な奴隷でした。いまはその忌々しく無情な習慣からの解放に、誇りを感じるようになっていきます」(35)と打ち明けるとき、ヘイルのテクストはさらに「奴隷」という言葉をめぐって、その両義性を表面化させる。テクストに頻出する「奴隷」という言葉は別の文脈でも使用されているが、たとえば、夫が妻に家事の重要性を説こうと夫婦の口論が始まると、彼女はまさに「奴隷」という言葉を——「あなたは妻を奴隷にさせたいわけね」(38)という

ふうに——彼に投げつける。多くの家事労働研究で例証されているように、アンテペラム期の主婦たちはつねに「疲弊しており、彼女たちが口にする「奴隷」という表現は家事労働による身体的苦痛を示すばかりか、奴隷労働との類似関係を通して、家事労働そのものが女性の依存性や不自由を意味していた³⁷⁾。すると、メアリの軽薄な悪妻ぶりを呈していた発言の数々は、あらたな意味を付随することになる。いま一度、優秀な使用人のナンシーを解雇したいとするメアリの理由に、耳を傾けてみたい。

ナンシーにあらゆる特権を与えてしまったのは、わたしは心穏やかでいられないのです。家庭に入ってから、あなたとあの使用人とのあいだに挟まれて、わたしはずっと惨めでした。(40)。

メアリの不満はたんに彼女の利己性にあるのではない。テクストに三度現れる「特権」という言葉は、彼女がナンシーについて語るさいに用いられ、それは(使用人が保持する)講演会への参加の自由や自由労働による賃金の獲得など、中流階級家庭の主婦が手にすることのできない種々の「自由」を指す。キャロル・ラッサーが論証しているように、使用人が自由労働市場

を通して自立と主体性を確立していくのに対し、女主人たちは、そのような市場と使用人に頼らざるをえない自身の権威失墜に直面していたのである³⁰⁾。メアリの不満とは、法的に自立する「夫」と自由労働者である「使用人」との狭間から生じるものであり、いかなれば、結婚という制度下における妻の法的不由(依存)や、奴隷労働になぞらえる妻の家事労働という義務、そして、それに束縛されることに起因する「惨めさ」にはかならない。最終章では、メアリはルース叔母に宛てた書簡のなかで自分の結婚生活——夫と使用人との暮らし——を振り返り、「このような生活を送り、わたしは不安で、不幸な人間でした」(141)と率直に語っているが、これは妻と「女性の領域」の間

係性についての事実、および、自由への渴望を公然と言わしめたものであろう。夫を当惑させたメアリの家事への無関心とは、良妻となれば完全に自由を放棄すると認識しているがゆえの身振りなのだ。「愚かな妻」ないし悪妻であることは不幸であり、また、良妻となっても自由を断念せねばならない。しかし、その自由の放棄とは、逆説的にも「自由であること」についての真摯な議論の契機にもなりえているのである。ここにこそ、テクストがその表面上の教本的提示とは異なる方向にむかう本意があるのでないか。ヘイルは、当時の女性読者にしか読み取ることのできない「自由であること」の意味をそこに潜ませ、それを問い質していく可能性を残したのである。

註

- (1) Harriet Beecher Stowe, "Trials of a Housekeeper," *Cody's Lady's Book* 18 (Jan. 1839): 6.
 (2) Hasia R. Diner, *Erin's Daughters in America: Irish Immigrant Women in the Nineteenth-Century* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1983), xiii. 『ハーディーメズ』誌に掲載された次のような物語のタイトルに注目された。Virginia De Forest,

"Biddy's Blunders," *Cody's Lady's Book* 50 (Apr. 1855), 329-330; Kate Harrington, "Irish Blunders," *Cody's Lady's Book* 51 (Sep. 1855): 247-248. アイルランド人女性のステレオタイプ化の背景には、中流階級家庭の主婦たちを煩わせた「使用人問題」があった。アンテベラム期の「使用人問題」について以下を参照のこと。Faye E. Dudden, *Serving Women: House-*

hold Service in Nineteenth-Century America (Middletown: Wesleyan UP, 1983), 44-71.

- (3) マッキンリーは「一九世紀前半のアメリカ社会に衝撃を与えた『厄介な威力』として『デモクラシー、都市化、移民、商売』を掲げており、物語の女性主人公たちが「管理の行き届いた中流階級家庭」という「上品なる媒体」を通じて、これらの脅威を「緩和」させていることに着目している。Blaine McKinley, "Troublesome Comforts: The Housekeeper-Servant Relationship in Antebellum Didactic Fiction," *Journal of American Culture* 52 (1982): 36, 43. もちろん、アメリカ合衆国が帝国として領土拡大や国家形成を邁進させていく時代に、本論文で取り上げる物語が産出されたことを鑑みれば、エイミー・カプランが議論しているように、「ドメスティシティ」という言葉をめぐって、帝国主義的な社会の流動性と家庭の形成とのあいだに見られる密接な共謀性をハウスキーピング物語から読みとることも可能かもしれない。たとえば、当時の人気作家T・S・アラーや後述するセララ・ハイルらのハウスキーピング小説には、泥酔事件を引き起こして白人中流階級家庭から解雇されるアイルランド生まれの使用人女性が登場する。彼女たちのアリスシユ性は、「ドメスティシティ」を介してアメリカの国家建設とパラレルに表象される中流階級文化には汲み入れられず、いわば「異質なもの」としての排除の構図が見られるところである。Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire in the Making of U. S. Culture* (Cambridge: Harvard UP, 2002), 24-26; T. S. Arthur, *Tired of Housekeeping* (New York: D. Appleton & Co., 1842), 67-71.
- (4) Mary Cathryn Cain, "Race, Republicanism, and Domestic Ser-

vice in the Antebellum United States," *Left History* 122 (2007): 64-65.

- (5) Sarah Josepha Hale, *Keeping House and House Keeping: A Story of Domestic Life* (New York: Harper & Brothers, 1845). 以下、このテキストからの引用頁数はこの版にもとづく。

- (6) イザベル・エントリケンヤルイス・フィンリーらハイルの伝記作家たちは、「感傷性」を強調するヴィクトリアニズム的な女性文化を拡大させた人物として、ハイルを捉えている。また、女性編集者としての立ち位置については、「フランク・モットによると、『チャーディーズ』誌には政治的話題を掲載しないとする出版者ルイス・モーディの方針に、ハイルは従順であったとされている。ハイルが反フェミニストのとされてきた最大の要因は、彼女が女性の権利拡大運動に対して否定的な姿勢を示したからだが、それについてのフェミニストの立場からの批判はモットとハイルを参照された」。Isabelle Webb Entrikin, *Sarah Josepha Hale and Cadey's Lady's Book* (Philadelphia: Lancaster Press, 1946); Luce E. Finley, *The Lady of Cadey's: Sarah Josepha Hale* (Philadelphia: Lippincott, 1931); Frank Luther Mort, *A History of American Magazines: 1741-1850*, Volume 1 (Cambridge: Harvard UP, 1938; Fourth Printing, 1966), 580-594; Suzanne Gossett and Barbara Ann Bardes, "Women and Political Power in the Republic: Two Early American Novels," *Legacy* 22 (Fall 1985): 16-17. ほか、マーナ・レイムのハイル論を皮切りに、近年ではハイルの著作における「家庭性」があわせて政治的であることが論議されている。Nina Baym, *Feminism and American Literary History* (New Brunswick: Rutgers UP, 1992), 167-182.

- (7) とくに一九九〇年代以降の「ドメスティシティ」論では、上述のカプランのほかジリアン・ブラウンやローリー・メリッシャー、ハッツィ・クリマスマスらによって、より徹底的に「男女の領域分離主義」の見直しが試みられてくる。Gillian Brown, *Domestic Individualism: Imagining Self in Nineteenth-Century America* (Berkeley: University of California Press, 1990); Lori Merish, *Sentimental Materialism: Gender, Commodity Culture, and Nineteenth-Century American Literature* (Durham: Duke UP, 2000); Betsy Klinasmith, *At Home in the City: Urban Domesticity in American Literature and Culture, 1850-1930* (Durham: University of New Hampshire Press, 2005).
- (8) McKinley, 39, 40.
- (9) ハイルは自著である家庭管理の手引書において、家庭の主婦を示すために「女主人」(mistress)よりも「アメリカ的な表現」である「主婦」(housekeeper)を好んで用い、また「よき家庭の主婦という名声」に値する女性を理想的な主婦としている。Sarah Josepha Hale, *The Good Housekeeper, Or, the Way to Live Well, and To Be Well While We Live* (Boston: Weeks, Jordan and Company, 1839), 117-118.
- (10) McKinley, 36, 39.
- (11) Cain, 64-65.
- (12) スーザン・ストラッサーによれば、共和国アメリカの主婦によって築かれる「使用人階級を必要としない」家庭は、キャサリン・ビーチチャーのようなアンテハラム期の家庭理論家にとって理想的であり、使用人を雇う主婦は「女性の主要な責務を回避する」者として、共和主義的精神から「不名誉」(dis-

honor)であった。この点についてキャスリン・スクラーも参照した。Susan Strasser, *Never Done: A History of American Housework* (New York: Pantheon Books, 1982), 166-167. Kathryn Kish Sklar, *Catharine Beecher: A Study in American Domesticity* (New Haven: Yale UP, 1973), 151. 「不名誉」の意識とは、共和国市民は「自立した小生産者」であるべきという共和制理念に由来するものであろう。「雇われ者」とその状態を示す「隷属」や「賃金労働」は、共和主義的自由に対する脅威を想起させた。Eric Foner, *Free Soil, Free Labor, Free Men: The Ideology of the Republican Party Before the Civil War*, With a New Introductory Essay (New York: Oxford UP, 1995), xiii; David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*. Revised Edition (London: Verso, 1999) [1991], 35.

- (13) 社会の賃金労働化は、白人男性に対して共和国市民かつ「男性」としての自己像を脅かした。「雇われ者」は「依存」を含意していたばかりでなく、依存とは具体的に「夫に法的に従属する妻」という女性の身分を指していたため、「女性化する」不安が広まっていたのである。だが他方では、自由労働思想の伝統として、賃金労働そのものは依存を誘発するものではないとの言説も存在しており、さらに「男女の領域分離主義」が賃金労働を肯定化した。つまり、夫の非依存的(自立的)な賃金労働は妻の依存的な家事労働と明確に区別され、それによって白人男性の自己形成にともなう不安は払拭されたのだった。Amy Dru Stanley, "Market Life and the Morality of the Market." *The Market Revolution in America: Social, Political, and Religious Expressions, 1880-1880*. Melvyn Stokes and

- Stephen Conway, eds. (Charlottesville: UP of Virginia, 1996), 84-86; Roediger, 45.
- (14) Cain, 64. 「家事用人になること」に対するアメリカ白人女性の不快は以下を参照のこと。 Dudden, 7-8; Christine Stansell, *City of Women: Sex and Class in New York, 1789-1860* (Urbana: University of Illinois Press, 1987), 157.
- (15) Diner, 71; Carol Lasser, "The Domestic Balance of Power: Relations Between Mistress and Maid in Nineteenth-Century New England," *Domestic Ideology and Domestic Work*, Part 1, Nancy F. Cott, ed. (Munich: K. G. Saur, 1992), 123. ただし、一八五〇年のポストンヤー一八五五年のニューヨークでは「家事用人の七割以上がアイルランド出身者であった。Margaret Lynch-Brennan, *The Irish Bridget: Irish Immigrant Women in Domestic Service in America, 1840-1930* (Syracuse: Syracuse UP, 2009), 84; Stansell, 156-157.
- (16) Dudden, 115.
- (17) Catharine E. Beecher, *A Treatise on Domestic Economy, for the Use of Young Ladies at Home, and at School* (Boston: Marsh, Capen, Lyon, and Webb, 1841; reprint, New York: Source Book Press, 1970), 200-201. 以下のテキストからの引用頁数はこの版にもとづく。
- (18) ヘイルはピーチャーと同様に、アメリカ人主婦たちが家事使用人を雇わずに家庭管理すべきことを理想としていた。だが、ヘイルは現状を重視してアイルランド人女性の雇用を認めざるをえないとした立場から、『ゴードリーブ』誌にて移民女性たちを優秀な家事用人へと養成する訓練施設の必要性について訴えている。 Sarah Josepha Hale, "The Industrial Women's Aid Association," *Coley's Lady's Book* 56 (Jan./Mar. 1858): 82, 276-277.
- (19) Laurie Ousley, "The Business of Housekeeping: The Mistress, the Domestic Worker, and the Construction of Class," *Legacy* 232 (2006): 135, 141. ストウの自由労働思想および「契約」観については以下を参照された。 Rachel Naomi Klein, "Harriet Beecher Stowe and the Domestication of Free Labor Ideology," *Legacy* 182 (2001): 135-152.
- (20) McKinley, 37; Barbara Ryan, *Love, Wages, Slavery: The Literature of Servitude in the United States* (Urbana: University of Illinois Press, 2006), 1-2.
- (21) Ryan, 21.
- (22) このようなキリスト教的「女主人」像を理想的モデルとすることについて、メリ・ケインの議論を参照されたい。ケインは「真の共和主義者」が家庭を階級差のない空間に仕立てようとするときに生じる、家庭内階級差別と人種的差異のすり替えを指摘する。アイルランド人移民は「白人ではない」という人種観念上の前提にもとづき、キリスト教徒として慈恵の心をもつアメリカ白人女性がアイルランド人女性を「黒人」として「文明化する」ことは、自身に課せられた使命として捉えられた。 Cain, 66-68.
- (23) ここでいう「近代的」とは、アンテベラム期の中流階級家庭が「現在という時間軸において、伝統と当世風なものが交差する場」であるというトマス・アレンの議論による。本稿では、とくに初期共和制の伝統的価値観とヴィクトリア時代のブルジョアの価値観が融合された状態を指すものとする。 Thomas M. Allen, *A Republic in Time: Temporality and Social Imagina-*

tion in Nineteenth-Century America (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2008), 122.

(24) Stansell, 159.

(25) Dudden, 163.

(26) ニューイングランド地方の田園的価値観が賦与された女性像について、以下を参照された。Catherine E. Kelly, *In the New England Fashion: Reshaping Women's Lives in the Nineteenth Century* (Ithaca: Cornell UP, 1999), 229.

(27) Granville Ganter, "The Unexceptional Eloquence of Sarah Josepha Hale's Lectures," *Proceedings* 112:2 (2002): 277. イーグルの教育環境についての詳細な解説は、以下の評伝を参照せよ。Entrikin, 1-16.

(28) 『レディーズ・マガジン』誌は一八二八年に創刊され、九年間発刊された。Patricia Oker, *Our Sister Editors: Sarah J. Hale and the Tradition of Nineteenth-Century American Women Editors* (Athens: The University of Georgia Press, 1995), 44, 83.

(29) ガンターはハイルの『女演説家』(一八三九)を分析するにあたり、女性による公的な演説活動に対するハイルのあからさまな非難は「バラドクス」だと断定する。主人公の演説家としての才能や公的な場における女性の活動は否定されているのではなく、じつは肯定的に評価されているのであって、それは女性読者にしか「聴解」できないレトリックによって「コード化」されていると読む。そのような「バラドクス」に留意しつつ、本稿は夫の領域論的転倒を強調したうえでテキストの本意を問うものとした。Ganter, 275-276.

(30) アレンはセジウィックの小説分析において、妻の効率的管理力

が一家の経済的・道徳的破滅を回避すると論証している。ハイルのテキストにおいても、夫の発言には「家庭の領域と商業の世界をいかなる論理的基盤」が見られよう。Allen, 124.

(31) Dudden, 163; McKinley, 40.

(32) Millette Shamire, *Inexpressible Privacy: The Interior Life of Antebellum American Literature* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006), 25.

(33) Shamire, 22-24. シャミアは「リネラルな個人主義」が「所有」にゆとりをもち、近代の「私的化された個人は家屋を所有するように自己を所有した。なぜなら、彼は資産所有者だからだ。[……]」との根拠を示す。

(34) Shamire, 22-26.

(35) Shamire, 26-28. さらに「客間」と「書斎」について詳細な分析をめぐり (Shamir, 36-44, 45-51) とくに書斎についてはマーク・ウィグリーの建築史的な見地を引用して、家庭内における「私的な空間とは男性の書斎であり、[……] 誰の入室も許されない、知的な空間であった。[……]」と解説している。ウィグリーの論文については以下を参照のこと。Mark Wigley, "Untitled: The Housing of Gender," *Sexuality and Space*, Beatriz Colomina, ed. (New York: Princeton Architectural Press, 1992), 327-389.

(36) Ruth Schwartz Cowan, *More Work for Mother: The Ironies of Household Technology from the Open Hearth to the Microwave* (New York: Basic Books, 1983), 42-43.

(37) Cowan, 43; Stanley, 86-87.

(38) Lasser, 117-118, 132-133.

(まだ くみこ/修了生)